

わたしの戦時中体験



富士見市の平和のシンボル「平和の鐘」市役所前に設置されています

その2

終戦から75年。昨年に続き、4人の方に戦時中の思い出を寄せていただきました。4人の皆さん、学童期に戦争を体験されていて、鮮明に記憶に残っているようです。大切に語り継いでいきたいものです。

怖い中でもよく遊んだ子ども時代

秋元 茂利さん（鶴馬）



戦争体験者も減少し、少しずつ薄れてゆく記憶ですが、戦時中は小学校低学年で、生まれ育った南畑地区の農家には、各戸に畳1畳ほどの防空壕が作られていました。

学校生活では、登下校中に空襲警報が鳴れば南畑橋の下に、自宅にいる際は防空壕に避難し、時が過ぎるのを待ちました。

学校では警報1回目は教室で待機、2回目は帰宅の指示が出され、事前に決められていた部落単位での行動がとられました。

私たちは戦争中という感覚より、家に帰って遊べるという環境に内心喜んでいて記憶がありません。

家、畑には時限爆弾や焼夷弾が投下され、時限爆弾は時間の経過とともに爆発するものでした。

その中の1つが叔父の家の玄関先に落とされ大きな穴が開き、皆で見ていると先に落下したもののから順次破裂し、ついには爆発で玄関を破壊され、このとき初めて戦争の怖さを知りました。

た。また爆弾が破裂したときに腹に響く体感で、なお一層恐怖を感じました。終戦後は田畑が荒れ果て、至る所に人口池ができ、私たちにっては、戦争という悲惨な状況から副産物として現れた池が楽しみを与えてくれ、小魚をとったり1日中遊んだことを覚えています。今後二度とお互いを傷つけあうような戦争が起らないことを願うばかりです。

あれから75年の覚え

横山 昌子さん（関沢）



私の生まれは現在台東区（旧下谷区入谷町）である。戦火に巻き込まれたのは6歳であった。昭和20年3月9日夜半から10日明け方にB29の大襲来（入谷、浅草、本所）（注2）。下町一帯が焼け野原となった。上野東照宮、西郷立像広場から見える一変した風景であった。点々と焼け残った建物、木々が目に映った。大人たちの話では道路には判明しにくい物体がゴロゴロ異臭を放っている、家族や家を失ったと。幸いにも私の家族は無事であった。入谷小学校へ避難し、近所の人々とお会い、手を取り合って無事を喜ぶ。

疎開先を探しに父・兄は茨城へ、父は戻り母方の里の疎開先へと向かう。混乱の中の東京を後にした。記憶では線路を歩き大きな川を舟で渡り、大八車に乗せてもらった。私はもやしっ子子供だった。

終戦8月15日夏休みの屋下がり、家族がラジオの前で近所の人々も集まり玉音放送を聴いて泣いていた。食糧難はますます厳しく、田畑を借り、慣れない農業をした。物が失われても家族が笑顔と健康で過ごしました。

（注2）東京大空襲。

疎開の日々

佐藤 光江さん（鶴瀬西）



昭和19年、住んでいた名古屋の家を空襲で焼かれ、すぐ下の弟を「はやく」（注1）で亡くした私は5歳でした。職も失った父はツテを求めて、長野県飯山の製材工場働くことになり、住む家も信州中野、信濃竹原と転々とし、夜間瀬村（現山之内町）に移り住みました。翌年私は夜間瀬国民学校に入学。年の離れた兄は第四高等学校（現金沢大学）、姉は長野高等女学校に。周りで農家なのに、食べ物が入らず母の着物はほとんど食料に代わったにも関わらず、さつまいものツルの干したものを、ひえや高粱に混ぜて食べる日々で、常にひもじさに悩まされていました。爆撃は善光寺の方まであり、ずっとB29の爆音におびえていました。

母の弟は戦死。終戦直後に生まれた妹は、栄養不足で肺炎を繰り返し、父は八方手を尽くし、ヤトコニヤやペニシリンを手に入れ、命をつなぐ日々でした。戦後2年して名古屋に戻ると、一面焼け野原。MP（ミリタリーポリス、陸軍兵）のジープが走り回っていました。今、平和であることの大切さを感じています。

（注1）昔はかかるとすぐに死んだからという疫病の異称。小児赤痢など。

怖かった思い出

川村 ミエ子さん（鶴瀬西）



私の故郷は新潟県と山形県の境にある胎内というところで、山、川、海がある恵まれた場所です。

昭和20年8月の中旬、いつもと違う凄惨な爆音を響かせながら米軍の戦闘機が茅葺屋根すれすれに飛んできました。操縦席の兵隊さんがガムをかんでいる顔がはつきり見えたので怖くて玄関先にいた私はその場で腰を抜かして座り込んだままで立つことも出来なかったことを今でもはつきりと覚えていています。

両親は、飛行機が飛んでこない合間を見ては、田畑を忙しく走り回って仕事をしていました。2年生になった姉は、夏なのに綿の入った防空頭巾をかぶり学校に行きました。おじいちゃんも留守番で私と妹の面倒を見ながら昼になると朝の残りご飯に薩摩芋や豆などを入れた「おじや」を食べさせてくれました。また、外に出ら



→写真「昭和13年 鶴瀬駅から出荷される入間ゴボウ」（磨田純子氏蔵）
↓写真「昭和5年頃 鶴瀬尋常高等小学校学芸会練習」（小杉とみこ氏蔵）



→写真「昭和5年 スイカの収穫（羽沢地区）」（深井賢作氏蔵）



▼昭和20年4月2日、B29による市内の爆撃コース
★印は爆弾の投下されたおおよその場所



B29爆撃ルート（難波田城資料館作成）

れないので座敷で昔ばなしや歌をよく歌ってくれました。私はいつも、おじいちゃんの子守歌で昼寝をしていました。子守唄は「勝って来るぞと勇ましく」といった歌でした。

昼寝が終わると飛行機が飛んで来ない合間を見ておじいちゃんと川辺や野原に夕食の材料になる野草を摘みに行きました。家は農家であってもお米を作ることが主で野菜を作ることが出来なかったそうです。おじいちゃんに「これは食べられる」と言われてザル一杯に「アカザ」を摘みました。味はどんなだったか覚えていません。母は、おひたしや胡麻和えにして食べさせてくれました。

夜は、真夏なのに雨戸を閉め雨戸のない所には明かりが外に漏れないように「サ」で囲ったり、布で覆い。家の電灯のかさ周りには風呂敷を巻いた薄暗い中で母は縫物をしていました。

終戦日の前（13日）のことでした。お父さんが「今日、隣のお父さんに赤紙（召集令状）が来た。明日の14日に戦地に向かうぞうだ。今度は順番でうちだ」と言って覚悟を決めていたようです。しかし、翌日の15日の朝になっても赤紙は来ませんでした。お屋近くなつて終戦の玉音放送がありました。

私は、良かった外で遊べる。うれしくて飛び回っていました。私は6歳と2カ月でした。あれから70数年、今でも野道に「アカザ」を見つけると胸が痛くなると同時に懐かしさが蘇ります。

あの日「日本が戦争に負け、怖かった日」の思い出が今でも頭から消えることはありません。戦争は二度とあってはならない。今こうして元気で平和な日本で暮らせる日々感謝です。